

サンプル版
酔夢リーマン 淫行バトン

作者：金目

目次

製品版概要.....	2
第1話 ベンチでイケメンが寝ていたから	3
第5話 理想の状況・理想の足があったから	14
奥付	21

製品版概要

本文 72 ページ、全 10 話。

各話タイトルと概要は以下の通りです。

第1話 ベンチでイケメンが寝ていたから

毛巻き包茎チンポと社員証の画像を撮影されたうえ、画像をロック画面に設定されてしまう。

第2話 毛巻き包茎が寝ていたから

チン毛をむしられ、包皮に植えこまれてしまう。

第3話 毛ブラシ包茎が寝ていたから

手コキ射精させられたうえ、その様子を動画として撮影されてしまう。

第4話 チン毛ザーメン野郎が寝ていたから

スーツと財布を盗まれ、卑猥な落書きをされてしまう

第5話 理想の状況・理想の足があったから

靴下を被せた状態で射精させられたうえ、ザーメン靴下を履かされ、足の臭いを嗅がれてしまう。

第6話 むしゃくしゃしていたから失禁させてやった

チンポに靴下を被せられたままの状態で失禁させられたうえ、その様子を撮影した動画を投稿されてしまう。

第7話 夢精シーンの参考資料が欲しかった

ボクサーパンツを穿きなおされたうえで、エロ動画の音声で夢精を誘発させられる

第8話 好みのイケメンがフルチン素材だったから

顔面にザーメンをぶっかけられたうえ、ダブルピース画像を撮影される

第9話 ここまできたならこれぐらい無傷だろ

ケツにローターを4つ挿入されたうえで禪を締められる

最終話 先輩の弱みを見逃すはずないじゃん

顔を拭くウェットティッシュのために、ケツを差し出すしかなくなった広戸の屈辱のアナル処女喪失・アナルセックス

このサンプル版では、第1話と第5話を掲載しています。
ご購入の参考にいただければ幸いです。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたAI・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

第1話 ベンチでイケメンが寝ていたから

「おっもしろくねーなー。

なーにが大手企業にお務めなんですってえ、だよ」

歓楽街の外に向かって歩きながら、男はぼやいていた。

男のイニシャルはS、フリーライターをしている、

大きな依頼を終え、普段の倍近い報酬を得たSは、ちやほやされたい一心で、生まれて初めて歓楽街のクラブに行くことにしたのだ。

近所のスナックのおばちゃんと違い、歓楽街のクラブには、それはもう洗練された女性たちが着飾っており、高いお酒とおつまみに相応しい話術で楽しませてくれるのだらう。

Sは見栄を張るために、ちょっと奮発をしてスーツを買い、とあるクラブに入ったのだ。

だが、間が悪いことに、そのクラブはほぼ貸し切り状態であった。

半分ぐらいのホステスとママが、お得意様とかいうエリートサラリーマン集団の相手をしており、Sは隅っこの席で、明らかに新人ホステスと過ごすしかなかった。

どうして新人だと分かったかと言うと、「あちらの席、大手企業の方々なんですって。スーツの質もいいし、羽振りが違いますよね」と客を比較するという接客業のNGをかましやがったからだ。

Sは、「まあそういうものでしょ」と中身の無い相槌を打ち、注文をしたボトルのワインを半分ほど飲んだところで、フルーツの小皿を注文してやり、そのまま帰ることにした。

ママは、御最良の大手企業様がよほど大事なご様子で、Sが会計を済ませるまで、新人ホステスがやらかしたことについて、何もフォローをしなかった。

「これなら、いつものスナックでだべってた方がマシだったなあ」

Sは、ちやほやされたいのなら相手に上客だと思われたいといけな、という世知辛い心理を悟り、大人の階段を一步登った。

Sは、ネクタイを緩めながら溜息をついた。

奮発して買ったスーツも、しばらく着ることはないだろう。

フリーライターであるSは、顧客相手に見栄を張る必要がない。

これまでの仕事をまとめたポートフォリオがSのスーツであり、名刺であり、顔であるためだ。

「面白くないな」

Sはぼやいた。

そんなに大手企業がいいのか、サラリーマンがいいのか。

いいに決まっている。

クラブにしてみれば、定期的に高収入が見込まれる大手企業のエリートサラリーマンが馴染みになってくれればありがたいに決まっている。

Sも、そのことは分かっているからこそ、あの無礼な新人ホステス相手に見栄を張り、フルーツの小皿を注文してやったのだ。

飲み直そう、と思っても、この歓楽街は、Sにとって生まれて初めて来た街であり、どの店が良いのかも分からない。

「……帰るか」

Sは、地元のスナックが懐かしくなった。

おばちゃんのちょっと雑な対応と、日によって濃さが違う梅酒のソーダ割り、そして、締めに出される残り物の焼きそばが恋しくなった。

Sは、スマートフォンで地図アプリを開き、最寄りの駅までの道順を確認する。

「はあ……」

地図アプリを見たSは、己の間抜けさに気がついた。

この歓楽街に来るために利用した地下鉄の駅は、反対方向にあったのだ。

むしゃくしゃした気分のまま、忌々しいクラブから離れる前に、地図アプリで確認をするべきだった。

Sは地図アプリで現在位置を確認する。

歓楽街に引き返すということは、あのクラブの前をもう一度通ることでもある。

それは、面白くない。

Sは、次に近い駅を探す。

現在位置から 15 分ぐらい歩くが、公園を抜けた先に地下鉄の駅がある。

「歩くか」

Sは呟き、忌々しい歓楽街に背を向けて歩き出した。

地下鉄の駅に向かうため、公園に入ったSは、ぎょっとした。

街灯に照らされたベンチで、サラリーマンが寝ていたのだ。

遠目に眺めても分かる程度に、サラリーマンのスーツは仕立てが良い。

それこそ、Sが面白くない時間を過ごしたクラブの上客である大手企業のエリートサラリーマン様と引けを取らないだろう。

面白くない時間を思い出す羽目になり、Sは顔をしかめた。

見なかったことにしてやろうか、とSは思った。

いや……見なかったことにするのは、流石に社会人として駄目だろう。

Sは、社会人としての必要最低限の親切心で、高いスーツを着たサラリーマンに近づいた。

ベンチの前に立ったSは、酒気とほのかに香る柑橘系の匂いに気がついた。

このお高いスーツを着たお偉いサラリーマン様は、酔っぱらって寝ているだけなのだ。

社会人として必要最低限の親切心で動いていたSの心に、忌々しさがこみ上げる。

柑橘系の香りは香水で、体臭へのケアもしているということは、お偉い大手企業様の営業様だろうか。

Sは、酔っぱらって眠っているサラリーマンを見下ろす。

夢を見ているのか、サラリーマンは唇をむにゃむにゃと動かしている。

顔の造形は整っている。

顎周りは髭の剃り残しもない。

毎朝丁寧に剃っているのか、剃る手間を省くために高い金を出して永久脱毛をしたのか。

「営業なら、顔も仕事道具だもんな」

面白くない思いから、Sはサラリーマンの鼻を摘まんだ。

Sの指先には、毛穴脂特有の感触がない。

「ふがつふがつ」

眠っているサラリーマンの間抜けな寝息を耳にしたSは、サラリーマンの鼻から指を離した。

サラリーマンの鼻は、鼻毛も見えなければ、毛穴の黒ずみも見えない。

摘まんでも毛穴脂の感触がないのだから、顔も毎日丁寧にケアをしているのだろう。

酔って夢見心地の臉は閉じられているが、その形からキリッとした目つきなのだろう、とSは想像する。

眉毛も整えられている。

髪の毛にはワックスの艶があり、オールバックにまとめられている。

ただ、ベンチなんかで眠っているせいか、前髪がひと房、額に零れている。

「イケメンは、髪が乱れてもイケメンってか」

Sは、サラリーマンの額にかかった前髪を摘まみ、ぼやいた。

Sは、ベンチで眠っているサラリーマンを見下ろす。

仕立ての良いスーツ、首元までボタンをかけたワイシャツときちんと締められたネクタイ。

ワイシャツは大胸筋の厚みで緩やかに盛り上がっている。

ベルトの上に腹の贅肉の弛みは見られない。

Sは、ベルトの上あたりに掌を置く。

「……硬いな」

ワイシャツ越しのしなやかな腹筋の感触にSは感嘆する。

ワイシャツを緩やかに盛り上げる大胸筋や、腹筋の引き締まりから想像をするに、このサラリーマンは身体づくりも欠かしていないのだろう。

第一印象が武器となる営業の仕事で、だらしない身体つきは、だらしない人格と思われることを避けるためなのだろう。

イケメンで、身体つきも男らしく、スーツに金をかけられる程度に稼いでいる。

Sの中で、先ほどのクラブで感じた惨めさが蘇る。

「あちらの席、大手企業の方々なんですって。スーツの質もいいし、羽振りが違いますよね」

Sと同じテーブルについてた新人ホステスの失言への鬱屈が蘇る。

Sは、卑屈な笑みを浮かべた。

きちんと身体を鍛えている爽やかなイケメンが、酔っぱらって、公園のベンチで眠りこけている。

大手企業のサラリーマン様への鬱憤を抱えたままのSの前で、眠りこけている。

Sは、ベンチの下に転がっている鞆を拾い、中を開けた。

Sは、他人の鞆を勝手に漁る行為が違法行為であると認識している。

その上で、仕立ての良いスーツを着てベンチなんかで眠りこけるイケメンサラリーマンについての情報を得るため、鞆の中を漁る。

だが、鞆の中身はSにとって使い道の分からない書類しかなかった。

Sは続いて、イケメンサラリーマンのジャケットを漁る。

ジャケットを広げられ、内ポケットまで漁られているというのに、イケメンサラリーマンは酒気を漂わせながら眠ったままだ。

「何も文句を言わないのだから、同意が成立しているよな」

Sの言い草は、卑怯者の詭弁でしかない。

Sは、イケメンサラリーマンの内ポケットからスマートフォンを取り出し、ベンチに置いた。

続いて、逆の内ポケットから幅広の財布を取り出した。

Sの周囲では用いる者もない、幅広の財布。

紙幣にしわをつけるものではない、と紙幣を曲げずに扱える幅広の財布から、羽振りの良さを察し、Sは舌打ちをした。

そして、Sは財布の中から社員証を取り出した。

「はーん」

Sは、嫉妬と苛立ちの息を吐いた。

社員証に記された会社の名は、Sもよく耳にする有名な大企業であった。

有名アスリートがコマーシャルに出ていることで知名度が高い大企業……それこそ、あの忌々しいクラブの上客であったエリートサラリーマン様の勤務先と同等の大企業だ。

Sは、卑劣な優越感に満ちた笑みを浮かべた。

「駄目じゃないか、営業1課の浅子広戸くん」

社員証に記された名を読み上げながら、Sは卑屈な優越感に身体を震わせた。

ご立派な大企業の、スーツや身体づくりに金をかけられるエリートサラリーマン様であらせられる、浅子広戸くんが、今、卑しいSの前で無防備に眠りこけているのだ。

「こんなところで眠っているってことは、悪い大人の玩具にされたいってことだよねえ。

ほんとうに、いけない子だよ。

悪い広戸くんには、お仕置きが必要だ」

Sは、眠りこけている広戸のベルトを緩める。

それからスラックスのボタンを外し、チャックを下ろす。

大きなもっこりが、Sの前に現れた。

「おいおいおいおい、デカいなあ、おい。

顔はイケメン、身体は男前、チンポはビッグマグナムか。

欲張り過ぎだろ、おい」

Sは、広戸のもっこりを指先でつつきながら言いがかりをつける。

広戸のもっこりは、むにむにと柔らかく、萎えチン状態でのボリュームでもっこりを押し上げていることが分かる。

「これはもう、罪深いチンポを改めないで駄目だよな」

Sは広戸のスラックスに手をかけ、膝下まで下ろそうとする。

だが、酔っぱらって眠りこけている広戸の体重がケツからかかり、スラックスを押さえ込み、Sの淫行を阻もうとしている。

Sは一度スラックスから手を離し、両腕を肩から回した。

そして、深呼吸をしてから広戸のスラックスを強く握り、体重をかけながら引き下ろしていく。

仕立ての良いスラックスが、強引な力のかけ方でしわをつけられていく。

Sは、スラックスの価値など気にもせず、広戸のデカチンを丸裸にするためにスラックスを膝下まで下ろした。

広戸のパンツは、太ももと股ぐりに臍脂色のラインが入った、深い紺色のボクサーパンツであった。

股ぐりの臍脂色のラインからもっこりが大きく盛り上がっている。

もっこりが大きいため、前合わせのラインも大きく曲線を描いている。

Sは、広戸の太ももに手を這わせる。

うっすらと脂肪が乗った太ももの撫で心地は滑らかで、ムダ毛の気配もない。

大企業の営業が顧客の前でスラックスを下ろすこともないだろうし、天然のツルツルか、

あるいは永久脱毛済みなのだろう。

「チン毛があるか確認すればいいか」

Sは呟き、先ほどと同じ要領で広戸のボクサーパンツを下ろした。

広戸の股間では、もっこの大きさにふさわしいデカチンがぐでっと寝そべっていた。

玉袋は大きく、金玉は並みの男より大きい方だろう。

陰茎も太く長く、もさもさと濃いチン毛に隠れることなく、存在感を強烈に示している。

「でも、包茎なんだよなあ、広戸くんは」

Sは、広戸の萎えチンを摘まみ、鼻で笑った。

広戸の亀頭は、ほぼすべてが包皮に覆われており、鈴口がちょっと見えているぐらいだ。

ションベンをしたあとに巻き込んだのか、包皮から縮れたチン毛が数本伸びている。

「駄目じゃないか、広戸くん。

毛巻きチンポなんて、みっともないぞお」

Sは広戸の包皮に絡むチン毛を見下し、卑屈に笑った。

Sはベンチに置いたままの、広戸のスマートフォンのことを思い出した。

Sは広戸のスマートフォンを手に取り、広戸の右手の親指にセンサーを当てた。

スマートフォンのディスプレイが点灯し、ロックが解除されたことを示した。

「駄目じゃないか、営業1課の浅子広戸くん。

指紋ロックだけじゃ不用心だろう？」

Sは笑いながら、画像フォルダを開き、新しくフォルダを作成する。

フォルダ名として、「毛巻きデカチンの広戸くん 28 歳」と打ち込む。

いや、待てよ……

Sはフォルダをタップし、フォルダ名を入力し直す。

デカチンを削除し、包皮と入力し直す。

Sが広戸のスマートフォンに勝手につくったフォルダ名は、「毛巻き包茎の広戸くん 28 歳」と更新された。

「じゃあ、広戸くんの毛巻き包皮をきちんと記録してあげよう」

Sは広戸のデカチンにスマートフォンを向け、撮影ボタンを押した。

静まり返った公園に響く程度のシャッター音が響いた。

Sはシャッター音を気にすることなく、広戸の包皮がチン毛を巻き込んでいる様子を、角度を変えながら撮影し続ける。

広戸は、ときどきシャッターの音に眉を寄せるが、眠りこけたままだ。

ある程度撮影をしたSは、画像を確認する。

そして、広戸の包皮に絡むチン毛がなるべく汚らしく見える画像を選別しようと見比べ始める。

スマートフォンを開いた広戸が、己の包茎の汚らしさを突きつけられ、仮性包茎を強く恥じ、思わず叫んでしまいそうになるほどの、チン毛の絡み方が汚らしい亀頭を選別してやろう、とSは笑う。

けれど、広戸のスマートフォンのディスプレイで、広戸のデカチン亀頭を眺め続けているうちに、Sは気がついた。

広戸のデカチンは、包皮越しにも分かる程度に雁首が高いのだ。

仮性包茎でなければ、デカイこと自体に言いがかりをつけるしかなくなるデカチンだ。
「生意気だな」

Sは呟いた。

広戸のスマートフォンで広戸の毛巻きデカチンを撮影するだけでは、足りない。

もっと、なにか、大手企業の営業1課の浅子広戸くんをビビらせるような、えげつないことをしてやりたい。

Sは広戸のスマートフォンを手に持ったまま、その場をうろうろし始めた。

忌々しい大手企業の営業1課、憎たらしいエリートサラリーマン様である広戸を辱めるために、何が必要だろうか、と文章のネタ出しをするときのように、Sは歩き回りながら思案する。

しばらく歩き回ったのち、Sは広戸の社員証を思い出し、閃いた。

Sは広戸の鞆からクリアファイルを取り出し、仰向けに寝ている広戸の太ももの上に置いた。

クリアファイルの位置を下腹部側に動かし、クリアファイルの上に広戸の陰茎を乗せてやる。

続いてSは、広戸の社員証を手取る。

広戸の社員証は、左側に顔写真、右側に会社名と所属、所属部署の連絡先が記載されているものである。

「まあ、会社名は隠してやるかな。

せめてもの情けだ」

Sは白々しいことを呟き、クリアファイルと広戸の包茎の間に社員証を挟んだ。

広戸の陰茎は平常時でも太く、長いため、社員証の2/3程度が隠れてしまう。

広戸の顔写真はちょうど、男が毛巻き包茎と嗤った亀頭で隠されている。

Sはまず、毛巻き包茎で顔写真が全部隠されている状態で画像を1枚撮影した。

そして、「毛巻き包茎の広戸くん 01」と名前をつけ、「毛巻き包茎の広戸くん 28 歳」フォルダに移動させた。

「広戸くん、デカチンでよかったな。

チンポがデカイからこそ、個人情報を守れたんだからな」

Sは、白々しいことを呟き、クリアファイルの上にある社員証を少し回転させ、広戸の顔写真の口元を毛巻き包茎の横に出してやった。

「自己紹介はきちんとしないと駄目だよ、広戸くん。

ほら、お顔と毛巻き包茎のセットだよ」

男は卑劣な優越感に下品な笑みを浮かべ、広戸のスマートフォンで広戸の毛巻き包茎を撮影する。

Sは広戸のスマートフォンで、広戸の毛巻き包茎と社員証の顔写真の具合を確認する。

広戸の毛巻き包茎の横に、広戸の口周りの写真が見えていることが、Sには面白い。

Sは、2枚目の画像に「毛巻き包茎の広戸くん 02」と名前をつけ、同じように「毛巻き包茎の広戸くん 28 歳」フォルダに移動させる。

「いやあ、我ながら才能があるなあ」

喜悦に笑いながら、Sはさらに広戸の社員証を回転させた。

今度は、広戸の顔の下半分だけを広戸の毛巻き包茎で隠した画像を撮影する。

広戸のスマートフォンで撮影した画像を確認したSは、思ったとおりの画像であることに満足をし、「毛巻き包茎の広戸くん 03」と名前をつけ、「毛巻き包茎の広戸くん 28 歳」フォルダに移動させた。

「そうだな、今度は毛巻き包茎らしい画像も撮影しないとな」

Sは、広戸の社員証を更に動かし、広戸の包皮に絡むチン毛が広戸の顔写真にかかるように移動をさせた。

広戸の包皮に絡むチン毛は 2 本ぐらいしかなく、チン毛 2 本で顔写真を覆えるわけもない。

正確に描写をするのならば、広戸の毛巻き包茎の先に広戸の社員証の顔写真が見えている状態だ。

「うんうん、さすが毛巻き包茎の広戸くんだ。

きちんとチン毛で顔写真が隠れているじゃないか」

Sは白々しいことを呟き、広戸のスマートフォンで撮影を行う。

そして、広戸の毛巻き包茎と広戸の顔写真が並ぶ画像を「毛巻き広戸くん」と名づけた。

Sは、「毛巻き広戸くん」と名づけた画像をコピーする。

そして、今年の画像一覧の 1 月 1 日に「毛巻き包茎に昇るイケメンの俺」と名づけ直した画像をペーストし、スターもつけて画像フォルダの先頭に表示されるように設定してやった。

何らかのタイミングで画像フォルダを開いた広戸は、先頭に表示されている己の顔と毛巻き包茎が並ぶ画像を見て、どんなに驚き、そして羞恥に悶えるだろうか？

フリーライターとしての想像力を用いて、Sは「毛巻き包茎に昇るイケメンの俺」を見つけてしまった広戸の様子を夢想する。

爽やかなイケメン顔を歪ませ、絶叫し、周囲の人間の注目を集めてしまうだろうか？

爽やかなイケメンであり、有名大手企業の営業 1 課所属なのだから、恋い慕う女性社員もそれなりにいるだろう。

そして、女性社員たちの注目と関心を集めていることを面白くないと感じている男性社員たちも、広戸の動向に注目し、何かミスをしないか、と待ち構えているだろう。

そんな中、広戸が叫べば、周囲の注目は集まるだろう。

叫ぶほどに動揺する広戸を心配し、誰かが広戸の様子を確認する。

広戸は、他人に覗かれる前にスマートフォンをしまえるだろうか？

うっかり覗かれ、毛巻き包茎の先に広戸のイケメン面が写った画像を見られてしまったら、広戸の評価は地に落ちるだろう。

広戸のように爽やかなイケメンであろうとも、毛巻き包茎はダサい。

そして、毛巻き包茎と己の顔を並べた画像をスマートフォンに保存しているような変質者への視線は冷たいものになるだろう。

身に覚えのない毛巻き包茎写真だけでも大変だろうに、周囲の人間に冷たい目で見られ、遠巻きにされたら、イケメンゆえに周囲に人が絶えない広戸くんには、とても辛い孤独になるだろう。

「ああ、かわいそうな広戸くん」

Sは、恍惚の笑みを浮かべた。

大手企業の営業1課でバリバリ働いている爽やかなイケメンが、酔っぱらって公園のベンチで眠りこけていたばかりに、ダサい毛巻きチンポ画像で破滅してしまうのだ。

Sは、己の夢想到満足そうに頷いた。

現実の広戸は、眠りこけたままだが、毛巻き包茎は太ものの上に乘せられたクリアファイルの上で晒されたままだ。

「間抜けな姿だな」

Sは笑い、別パターンで、毛巻き包茎丸出しの広戸に相応しい間抜けな末路を夢想し始めた。

「あの、浅子さん。

今、お時間よろしいでしょうか？」

珍しく定時で退勤できた広戸は、社員通用口の近くで女性社員たちに声をかけられ、何事だろう、と思った。

彼女たちは、広戸が属する営業1課と同じフロアにオフィスがある別の課の女性社員たちだ。

広戸はこれから、同僚たちと飲みに行く予定だというのに、何事だろうか。

彼女たちとは業務範囲が異なるから、急な仕事の話の可能性は低いだろう。

「内容によります」

女性社員たちに声をかけられる心当たりがない広戸は、念のため、予防線を張っておいた。

「あの、浅子さんがこの間行ったという温泉街について、印象とかを教えてもらえたら、と思ひまして」

「私たち、来月の連休に旅行に行く予定なんです」

「それで、御迷惑でなければ候補地の一つに行かれた浅子さんから、色々とお話を伺えればと思ひまして」

女性社員たちが言うように、数週間前に広戸はとある温泉街に一泊二日で旅行をしてきた。

だが、同じ課でもない彼女たちが、どうして、広戸のプライベートを知っているのだろうか？

「ああ、あの煎餅だな」

一緒にいた同僚の言葉を聞いた広戸は、疑問の答えに思ひ至った。

温泉旅行中に、広戸は名物の煎餅を何箱か購入した。

そのうちの3箱を営業1課に「お茶請けにどうぞ」と置いておいた。

その煎餅が同じフロアで勤務する彼女たちにも流れたのだろう。

「いいんじゃないか、浅子。

ちょっと写真を見せながら教えてやったらどうだ？」

飲みに行く予定の同僚にこう言われては、広戸も断る理由がない。

「いいですよ、今開きますね」

広戸は、指紋でスマートフォンのロックを解除し、画像フォルダを開く。

「え」

広戸はスマートフォンに表示された画像を見て、驚愕した。

年月日の降順に並んでいるはずの画像フォルダの先頭に、見覚えがあるけれど、あつてはならないものが表示されていたのだ。

広戸の社員証の顔写真と、その隣に写っているのは、包皮にチン毛を巻き込んだダサい毛巻き包茎だ。

どうして、こんなものが画像フォルダの先頭に固定されているのかが分からない。

しかもファイル名は、年月日ではなく、「毛巻き包茎に昇るイケメンの俺」という悪意に満ちたファイル名だ。

誰が、何の目的でこんなものを仕掛けたのか、広戸には分からない。

少なくとも、広戸は社員証を悪ふざけに使った記憶はないし、己の毛巻き包茎を自撮りした覚えもない。

「ん、どうした浅子？」

広戸の様子を不審に思ったのか、同僚が広戸のスマートフォンを覗き込んだ。

「は？」

同僚の呆れと侮蔑が混じった声を聞いた広戸は、スマートフォンを隠さないといけない、と気がついた。

広戸は慌ててスマートフォンをスーツの内ポケットに戻そうとする。

「いや！　なんてお前！　社員証とチンポの自撮りなんかしてるんだよ！」

だが、広戸がスマートフォンを隠すより先に、同僚は広戸の手首を掴み、広戸の毛巻き包茎画像を、「毛巻き包茎に昇るイケメンの俺」という悪意に満ちた画像を女子社員たちに向けてしまった。

「うっわ、ダサ」

「ないわー」

「え？　露天風呂で気が大きくなったんですか？」

女性社員たちの顔に、毛巻き包茎画像への侮蔑が浮かぶ。

広戸はこれまでの人生において、この顔と鍛えられた体格で女性にモテてきた。

幸い、悪質なトラブルに巻き込まれたこともなく、広戸にとって女性というのは、基本的に広戸にとって好意的な存在であった。

だからこそ、広戸にとって、女性社員たちの侮蔑が酷く堪えた。

撮影した覚えのない毛巻き包茎画像を、広戸の変態性の発露だという誤解を解かなければならない。

「ち、これはちがう！

何かの間違いなんだよ！」

広戸は必死に叫び、この場を収めようとする。

「本当だ！　信じてくれ！

俺はこんな写真を撮ってない！」

大声で叫び、必死に訴え、毛巻き包茎画像は広戸の意志によるものではない、と信じてもらおうとする。

「え？ でも毛巻き包茎なんですよ？」

「包茎ってだけで、なんか、ねえ？」

「しかも、チン毛が絡んでいるんでしょ？」

「ダサいし、汚い」

けれど、広戸は女性社員たちの侮蔑を見誤っていた。

女性社員たちは、変態自撮り写真への侮蔑ではなく、広戸の毛巻き包茎そのものへの侮蔑だったのだ。

交際、そして、結婚できれば収入面、そして周囲の女性へのマウントを取れるイケメンの広戸の価値が、彼女たちの想定を大きく下回ったことへの失望もある。

もしも、広戸と交際をできても、「でもあの子、あんなところに毛巻き包茎を突っ込まれているんでしょ？」と陰で笑われると、女性社員たちは勝手に想像をし、勝手に失望しているのだ。

「ちょっと待ってくれ！」

広戸はどうか、身に覚えのないこの不名誉を挽回できないか、と叫ぶ。

だが、広戸が叫んでいるこの場所は、社員通用口だ。

大手企業だから、社員通用口にも警備員が警備活動をしている。

そして、警備員たちにしてみれば、広戸の大きな叫び声は、事態を確認する必要がある事案だ。

「どうかしましたか？」

大手企業だからこそ、一人ではなく、一組の警備員が広戸たちの側にやってくる。

「この人が変態写真を見せてきたんです！」

女性社員の一人が、刺々しい口調で警備員に告げる。

「違う！」

広戸は叫んだ。

広戸は己の毛巻き包茎画像を撮影した覚えもない。

広戸のスマートフォンを勝手に女性社員たちに向けたのは、同僚だ。

広戸が自分の意志で、「毛巻き包茎に昇るイケメンの俺」なんていかがわしい画像を見せびらかしたわけではない。

警備員たちが広戸の手に握られたスマートフォンを見る。

そして、広戸に対して不審者を見る目を向けてきた。

「詰所まで来てもらいます」

口調こそ丁寧であったが、事実上の連行であった。

「どうしてこんなことに……」

警備員に腕を掴まれ、広戸は項垂れた。

翌日にはもう、広戸は左遷の辞令を出される。

女性社員にスマートフォンで変態自撮り写真を見せるような社員が、エリートでいられるはずがないのだ。

そして、広戸がダサい毛巻き包茎であることは左遷先でも流布され、本社の元エリートへ

のやっかみから、毎日のように毛巻き包茎を笑われ、弄られる末路が、広戸に待っているのだ。

「うんうん、中々いいな」

Sは、卑劣な優越感のまま、卑しい笑みを浮かべ、大きく頷いた。

広戸は、卑劣なSの存在に気がつくことなく、眠りこけたままだ。

「さすがに、俺が通報すると怪しまれるしな。

ふふふ、これで許してやるよ、毛巻き包茎の広戸くん」

Sは最後に、己のスマートフォンを取り出した。

そして、「毛巻き包茎に昇るイケメンの俺」という悪意を込めた名前のままの構図となっている広戸の毛巻き包茎と社員証を、スマートフォンで撮影した。

「さて、帰るか」

Sは鼻歌を歌いながら、地下鉄に駅に向かうため、公園の先に歩き出した。

Sの悪意によって、毛巻き包茎を丸出しにされたままの広戸は、まだ眠りこけている。

毛巻き包茎と社員証を並べて置かれていることにも気がつかず、広戸のスマートフォンに、広戸を辱める画像が保存されていることにも、気がついていない。

何より、画像フォルダの先頭に、「毛巻き包茎に昇るイケメンの俺」という悪意に満ちた画像が固定されていることにも気がついていない。

むにやむにやと、毛巻き包茎と社員証を丸出しに晒されたまま、広戸は暢気に眠りこけたままだ。

第5話 理想の状況・理想の足があったから

「なーんか面白いことないかなあ」

Nは、近所の公園を歩きながら呟いた。

Nは別に、何か困った事情を抱えているわけではない。

ただ、退屈なだけなのだ。

Nは、事故物件に居住することで事故物件の条件を解除する仕事に就いている。

ごく普通の神経をしているのならば、表沙汰にしにくい事情がある部屋に住みたいとは思わないのだろう。

けれどNは、趣味と実益、そして己の欲を紛らわせるために、事故物件を転々としている。

サスペンスとか、オカルトとか、何か、非日常に触れられないか、非日常のスリルによって、心を浮足立たせてみたい。

そういう欲望と、実益を兼ねて、Nは事故物件に住み続けている。

非日常を味わうのならば、フィクションで十分ではないか、と顔をしかめる知人も少なくない。

だが、Nにとってフィクションとは、作り事でしかなく、「こうすれば面白いと思ってい

るんだろうな」と醒めた目で見てしまう。

だから、フィクションではNは満足できない。

退屈に耐えかねたときに、映画の原作漫画とか小説とか、興行成績第1位とか、そういう美辞麗句に彩られた作品に触れてみるものの、作り物だな、と思って、すぐに飽きてしまうのだ。

深夜に散歩に出ているのも、何かしらの非日常に遭遇しないか、という期待を込めた行為である。

最も、Nは今まで特筆すべき事態に出くわしたことはない。

この世の物とも思えぬ悲鳴が聞こえて見に行ってみれば、発情した猫の交尾であったぐらいだ。

そんなに非日常が欲しいのならば、治安が悪い国に引っ越せばいいだろう、と両親には匙を投げられている。

そして、Nのとある個性を理由に、Nは両親に勘当されてしまった。

「なんか、レアイベントないかな。

深夜の殺人鬼とかなあ」

Nは不謹慎なことを呟きながら公園を歩く。

繁華街に近い公園だというのに、Nは今までこの公園でトラブルらしいトラブルを見たことがない。

今日も、つまらない結果に終わるのだろうか、と思いながら、Nは公園を歩く。

「んん？」

公園の一角にあるベンチに目を向けたNは首を傾げた。

街灯に照らされたベンチに、人が寝ていたのだ。

人が寝ているだけでも、Nが待ち望んでいた非日常だ。

しかも、寝ている人は、どうみても裸なのだ。

正確には、ボクサーパンツと靴下と靴だけを身に着けており、全裸ではないのだが、デカチンが丸出しの時点で全裸といっても差支えがないだろう。

それに、遠目に見ただけでも、男の身体には何かが書かれている。

「事件かな！」

Nは、笑みを浮かべ、スキップをしながら男に近づいた。

「おお！」

男の側に立ったNは歓喜の声を上げた。

男の姿は、Nが求めた非日常そのものなのだ。

男の額には、「ザーメンマニア」と書かれている。

左右の頬には、「オナ猿」「いつでもオナニー」と書かれている。

胸元には、「射精歓迎」「シコってください」と書かれている。

腹部には、「ザーメン営業部オナ猿1課 浅子広戸」と書かれている。

下腹部には、「シコった分だけ記録してください」と書かれ、正の字が2つ書かれている。

その側にはチン毛がたつぷりと絡んだザーメンが付着し、乾き始めている。

勃起している包茎デカチンは、射精の後始末もされておらず、包皮の隙間からチン毛が混じったザーメンが零れている。

勃起したままの包茎デカチンには、社員証が引っかけられている。

Nが社員証を手にとって確認すると、腹部に書かれたとおり、浅子広戸の名が記されている。

左右の太ももには「開放的オナニー修行中！」「デカチン丸出し最高！」と書かれている。

どこからどうみても、非日常そのものの広戸の姿を見たNは、舌なめずりをした。

「こういうのを待っていたんだよな」

Nは笑みを浮かべて呟いた。

広戸の身に何が起きたのか、Nは知らない。

これまで、4人の男たちに弄ばれ、スーツまで盗まれた結果が、パンツと靴下に全身の落書きという結果だということが、Nに分かるはずがない。

Nに分かるのは、晒し者にされている広戸の姿が、求め続けてきた非日常そのものの、ということだ。

「へへへ、こんな日が来るとはなあ」

Nはいやらしく笑った。

Nは、広戸の足元に移動をする。

そして、革靴を外し、広戸の足の臭いを嗅いだ。

「たまらねえ」

蒸れた汗と足指の生温かな湯気を鼻から吸い込み、Nは笑みを浮かべた。

両親がNの勘当を決意したもう一つの理由、それは、Nの臭いフェチである。

Nは、足の臭さが好きで好きでたまらない。

靴の臭いでは物足りないし、己の足でも満足できない。

実家に泊っていた親戚の足の臭いを嗅いでいたことを、父親に見咎められ、とうとう勘当されてしまった、というわけだ。

広戸の足の臭いを嗅いだNは立ち上がり、その場で踊った。

まさか！

まさかまさかまさかまさか！

こんなにもNの望みに合致した存在が、この世に現れるとは思わなかったのだ。

何らかの非日常に遭遇し、酷い目に遭った広戸が目の前にいる。

酔っぱらっていて、眠りこけていて、臭いを嗅いでも文句も言わない、理想の足だ。

Nは、もう一度、広戸の足に鼻を近づけた。

大きく鼻から臭いを吸い込み、Nは汗臭さと足指の間の生温かさを堪能する。

「ああ、最高だなあ」

Nは満面の笑みを浮かべた。

N自身、人の足を勝手に嗅いだら問題になることを把握している。

だから、今までその手のマニアの店だけで済ませていたのだが、マニアの臭いは、Nにとって物足りない。

飾らない、あるいは、足の臭いに気を遣わない素人の足の方が素晴らしいだろう、とNは夢想し続けてきた。

Nの欲望と妄想の果実こそが、今、ここで眠っている広戸なのだ。

Nはもう一度、広戸の足の臭いを嗅ぐ。

「たまらねえ」

Nは幸福に満ちた笑みを浮かべ、夜空を仰いだ。

夢想し続けてきた素人の足の臭い、非日常へのスリルに合わせて、理想の素人の足の臭いまで味わうことができ、Nは今、人生の絶頂だ。

Nは立ち上がり、眠りこけている広戸の姿をじっと見つめる。

ボクサーパンツと靴下、そして、社員証をデカチンに括りつけただけの晒し者とされている広戸の姿を、Nはじっと見つめる。

これまでのNの忍耐に、神が与えてくれた御褒美の姿を、Nは記憶に焼きつけようとする。

Nは、広戸の下腹部に描かれた正の字を見つめる。

Nの頭の中で、雷鳴のような発想が轟いた。

広戸の靴下の中に射精させて、足の臭いとセットで味わったらどうなるだろうか？

身体に書かれた落書きと、下腹部に引ついたザーメンから、広戸は既に射精させられている。

それならば、Nがさらに射精させても、誤差というものだ。

Nは、にんまりと笑い、広戸の足から右の靴下を脱がせた。

そして、靴下を鼻に押しつけ、Nは大きく臭いを嗅いだ。

素晴らしい、素人の足の臭い。

これが、ザーメンと混じり合うことでどうなるのか、と想像するだけで、Nはこれまでの人生で最高の昂りを感じてしまう。

Nは、広戸の包茎デカチンに靴下を被せる。

そして、靴下の上から広戸の包皮を掴み、Nは手コキをし始めた。

「うん……あううう……」

広戸が喘ぎながら腰を上下に動かし始める。

「いやらしい奴だな、広戸くんは」

Nは笑いながら、手コキを速める。

靴下の上からでも分かるデカチンの太さと長さ、硬さは、女の子にもモテモテだろうな、とNは想像する。

会社でもきっと、モテモテで、人気者なのだろう。

そんなデカチンイケメンが今、足の臭いを嗅がれるために靴下を被せられ、手コキされているのだ。

こんな非日常が、今、Nの手の内にある。

「最高だなあ、ああ、最高だ」

Nは、この巡り合わせに感謝を捧げながら、広戸への手コキを続ける。

先に何度か射精させられているためか、腰を上下に動かし、喘ぎながらも、広戸は射精しようとしなない。

少なくとも、Nのオナニーより時間がかかっている。

腕に軽い疲労を覚えながらも、Nは広戸への手コキを苦に思わない。

理想の素人の足の臭いに、ザーメンが加わることへの期待。

誰かに悪戯されてきた広戸に手コキをし、加害者となるスリル。

どちらも、Nにとって、求め続けてきた快楽、人生の目的なのだ。

Nにとって、今こそ、人生の絶頂なのだ。

この手コキの結果、広戸が目覚め、通報されたとしても悔いはない。

これから先、広戸のように非日常と無防備な足を備えた理想の存在など、現れるとはNには思えない。

だからこそ、今、ここで、Nのリビドーのすべてをぶつけるのだ。

「あ、ああ……ああああああああ」

広戸が腰を突き上げ、いやらしく喘いだ。

Nは靴下越しに広戸の尿道の脈動を感じた。

ドッドドと広戸の靴下からザーメンが広がっていく。

Nはしばらく手コキを続け、ザーメンが止まるのを待つ。

広戸のザーメンの臭いに、Nはゾクゾクする。

ザーメン臭さと、足の臭いが合わさったら、どうなるのだろう、と想像するだけで、Nは空イキしそうになる。

広戸の射精が終わったのを確認してから、Nは広戸の尿道を根本から扱き上げた。

そして、広戸のザーメンを絞り出すと、Nは、広戸の包茎デカチンから靴下を引き抜いた。

それからNは、ザーメン塗れの靴下を己の鼻先にかざし、臭いを嗅いだ。

「ああ、たまらねえ」

Nは喜悦の笑みを浮かべた。

ザーメンの臭いは人並みなのか、靴下に籠った足の臭いを完全に塗りつぶすほどではない。

ザーメンの臭いの陰に、隠し味のように汗臭さと足指の間の生温かさが漂っている。

「さあ、臭いのマリアージュだ」

Nは笑いながら、広戸の右足にザーメン塗れの靴下を履かせた。

そして、ザーメンの臭いと足の臭いが混じり合うまでの間、Nは広戸の左足の臭いを嗅ぐ。

「ビフォアアフタ、だな。」

さて、どうなったかな」

Nは呟き、ザーメン塗れの靴下を履かせた広戸の右足を嗅いだ。

ザーメン臭さと、汗臭さと、足指の間の生温かさが絶妙に入り混じり、夢に見たこともない素晴らしい臭いが、Nの鼻から肺を満たしていく。

「幸せだあ……」

Nはその場にしゃがみこみ、全身をガクガクと震わせた。

理想を越えた最高の臭いを嗅いだ幸福と高揚によって、Nは空イキしたのだ。

Nは、涎を垂らしながら身体を震わせ、最高の臭いが肺から全身に染み込むまで、息を止めた。

少しして、息苦しさに耐えかねたNは、鼻からゆっくりと息を吐いた。

勿体ない、と思いながらも、呼吸をしなければ死んでしまうから、Nは仕方なく、ゆっくりと息を吐き、鼻から息を吸った。

「ああ……」

Nは嘆きの声を上げた。

人生の絶頂、最高の幸せが過ぎてしまった。

最高の臭いが抜けてしまった。

先ほどまでNは、ザーメンと足の臭いが入り混じった臭いを嗅ぐために人生を賭けるつもりであった。

けれど、最高の幸せを味わったあとでは、もう一度、幸せを味わいたい。

もっと、もっと幸せが欲しい。

非日常のスリルが欲しいし、素人の足の臭いを嗅ぎたい。

Nは、広戸の左足を見た。

左足も、靴下を履いている。

Nは、広戸の左足を見つめながら、考える。

Nは、広戸がどの程度眠りが深いのかを知らない。

何しろ、私生活について知りもしない、一方的な初対面なのだ。

とはいえ、広戸の惨状を踏まえると、既に何人かに悪戯をされている。

そこに、Nによる手コキ射精まで加わった。

よほど不用心で深い眠りにについているのでなければ、これ以上の悪戯は、広戸が目覚ます可能性が高くなるし、Nのリスクも増えていく。

保身を考えるのなら、人生の絶頂と最高の臭いの思い出を胸に、この場を離れるべきなのだ。

だが、Nの足は動かない。

Nの目は、広戸の左足に釘づけた。

「もう一度、もう一度、味わいたい」

Nは呟き、広戸の左足から靴下を脱がせた。

そして、先ほどと同じように、広戸の包茎デカチンに靴下を被せ、手コキをし始めた。

「ああ……ああうあああ……」

広戸が最初よりも大きな声で喘ぎ、腰を上下に動かし始めた。

最初の靴下手コキよりも反応がうるさい。

やはり、誰かに何度も悪戯をされたことで、眠りが浅くなっているのだ。

Nの中で、存在しないと思っていた保身が警鐘を鳴らす。

このまま、手コキを続けたら、広戸が目覚まし、Nを告発するだろう。

そうなれば、Nは破滅する。

非日常のスリルを追い求めてきたはずのNは、破滅の予感にみぞおちのあたりが冷たく、縮みあがる恐怖を感じた。

Nは、己の中に保身が存在することにショックを受ける。

それでもなお、Nの手は、広戸の包茎デカチンを手コキし続けている。

Nにとって、保身よりも、足の臭いの方が優先されているのだ。

Nは、左手でみぞおちのあたりを押さえながら、靴下手コキをし続ける。

バレたら破滅することへの抵抗で、胃が縮みあがる不快感に耐えながら、Nは足の臭いのために手コキをし続ける。

「ああう……ああああ……」

広戸の眠りは浅くなっているのか、首を振りながら腰をくねらせ始めている。

広戸が起きたら、Nは破滅する！

そう分かっており、生まれて初めての保身の感情がNを止めようとしているのに、Nの手は、臭いフェチに突き動かされるまま、広戸への靴下手コキを止められない。

恐怖と、性癖への従順さで、Nの心は引き裂かれそうになる。

それでもNは、広戸への靴下手コキをし続ける。

「ああ……イくううううううう！」

広戸が腰を大きく浮かせ、大きな声で喘いだ。

包茎デカチンに被せられた広戸のデカチンからザーメンがどびゅっと吹き上がった。

「ひっ！」

吹き上がる広戸のザーメン越しに、Nは、薄目を開けた広戸を見てしまった。

Nの保身感情が、Nの全身に電撃よりも早く、鋭い指令を発する。

Nは慌てて立ち上がり、広戸に背を向けて駆けだした。

恐怖に胸を押さえながら、Nは涙を流した。

これまでの人生において、趣味と性癖を追及してきた人生のはずであった。

保身などとは無縁だ、と思ってきた。

だが、薄目を開けた広戸を見た瞬間、恐怖と保身に突き動かされたことで、Nは悟ってしまった。

Nは強がっていただけで、性癖が尖っているだけの臆病者だ。

そして、フィクションに満足できない感性では、これから先、Nは、広戸の足を上回る快樂追及などできるわけがない。

もう、Nの人生には、今夜ほどの幸せは訪れない。

フィクションという代用品に満足できず、かといって、通報されるかもしれないという恐怖に負けたNが、素人の足を嗅げる機会など、もう、訪れるはずがない。

Nはこの先、転落するだけなのだ。

敗走するNを見る者は誰もいなかった。

薄目を開けただけの広戸は、また、目を閉じ、むにやむにやと眠り始めた。

スーツと財布を盗まれ、全身に卑猥な落書きをされ、社員証を括りつけられている包茎デカチンには左の靴下が被せられたままだ。

そして、左の靴下には手コキさせられたザーメンがべっとりとついている。

右足には靴下手コキされた靴下を履かされており、ザーメン臭さが足先に染み込んでいる。

晒し者同然の姿になってもなお、広戸はまた、アルコールの余韻で夢の世界に沈んでいった。

奥付

サンプル版 『酔夢リーマン 淫行バトン』

初出 2026 年 08 月 01 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。